的齒齦ノ翻轉皺襞ノ近クニテ行ヒ骨ニハ各斷端ニ二個ノ穿孔ヲ造リ強力ナル金線ニヨリ齒齦ヲ被フテ結節シ斷端ヲ互ニ繋引スベキデアル尙著者ハ記シテ曰ク余ハ樂天家ニハアラザレド此方法ニヨルトキハ大シタ化膿又ハ腐骨ヲ生ゼズシテ其結果ヲ期待シ得ルト然シナガラ口腔外ニ遊離セル顎骨ノ線縫合ハ期待シ難イト。

二、伸展法

伸展法ハ無齒顎ヨリ中央部ノ爆突セル場合カ又ハ上行枝ノ著明ナル位置變換ノ際ニ之ヲ再ビ正位置ニ復スル時ニ用キラル、方法デ頭部繃帶ニヨリ強固ナル牽引機ヲ必要トスル。

患者ヲ臥牀セシメ滑車ト重錘トヲ以テ伸展スル方法ハ無意義デアルト述テオル何トナレバ極メテ僅少ナル頭部ノ運動モ此際骨斷端ヲ相互ニ引キ合ヒ決シテ治癒ニ趣カシメナイカラダト。

三、移植法

同種屬ノ材料ヲ以テスル骨移植法ハ戰爭中非常ニ驚嘆スベキ結果ヲ示シタ大ナル物質缺損、治癒機轉ノ緩慢ナル場合、又ハ新關節形成性ニ傾ケル場合ニ必要ナル方法デアル。

然シ此際完全ナル結果ヲ得ル爲ニハ結合セル骨斷端又ハ殘片ト移植片トガ全治スル迄正シキ位置ヲ保持スル様努ムル事が肝要デアルト。

尙骨移植法ハ今ヤ顎骨整型術ノ上ニ密接ナル關係ヲ有スルニ至

ツタト述ベテオル。

保存療法科

藥劑ノ齒根膜ニ及ボス作用ノ研究(「チモール」「オイゲノール」及ビ齒髓ノ腐敗產物ノ齒根膜ニ及ボス作用ニ關スル實驗)

Weitere Prüfungen der Wirkung von Arzneimitteln auf das Periodont. Experimentelle Untersuchungen über die Wirkung des Thymol und Eugenol, gleichfalls der Zerfallsprodukte der Pulpa auf das Periodont. G. Feldmann, D. M. schr. f. Zahn. 1926, H. 22.

十九世紀ノ齒科醫學勃興時代カラ「チモール」及ビ「エーテル」性油類ガ保存療法ニ應用セラレ出シテカラ以來現今ニ至ルマデ賞用セラレテ居ル。著者ハ果シテ此等ノ藥品ハ消毒劑トシテ用ヒ得ルカ、齒根膜ニ對シテ如何ナル作用ヲ及ボスカヲ實驗セント試ミタ。實驗ニ用ヒタル藥品ハ「チモール」「オイゲノール」デアル。動物ハ犬ヲ用ヒ「モルフィン、クロロフォルム」麻醉ノ下ニ嚴重ナル消毒ヲナシ、齒牙ヲ穿孔シ拔髓シ、出血アル時ハ「オキシフル」ヲ以テ根管ヲ洗滌シタル後「エーテルアルコール」ヲ以テ根管ヲ乾燥

セシメ然ル後後ニ述ベルガ如キ處方ノ糊劑ヲ以テ根管充填ヲ行ツタ。少量ノ酸化亞鉛ヲ飽和「チモールアルコール」ヲ以テ糊劑トナシ之ヲ少量ヅ、根管內ニ填入スル。又或ル場合ハ「チモール」ノ粉末ヲ根管口ニ置キ熱ヲ以テ溶解セシメミラー針ヲ以テ徐々ニ根管ヲ充填セシメル。「オイゲノール」酸化亞鉛糊劑ヲ以テ同様ニ根管充填ヲ行フ。斯クシタル後窩洞ハ「セメント」「アマルガム」ノ充填ヲ行フ。

對稱試驗トシテハ同様ニ拔髓シタル齒牙ノ根管ハ乾燥シタル儘トシ其ノ上ニ「セメント」「アマルガム」充填ヲ行フ。

實驗ニ用ヒタルハ年齢一乃至二歳及ビ八乃至九歳ノ犬七頭五十齒デアツテ、「チモール」根管充填ヲナシタルモノ十九例、「オチゲノール」根管充填十四例、何等根管ヲ充填セザルモノ十七例、試験期間ハ短キモノ一乃至二ヶ月長キモノハ九ヶ月ニ及ンダ。齒牙ハ主トシテ切齒及ビ小白齒ヲ撰ビ常ニ兩側ニ對稱トシテ健康齒ヲ存セシメ實驗ニ便ニシタ。「フォルマリン」液固定、硝酸液ヲ以テ脱灰シ「ツェルロイヂン」埋没切片ヲ作り「ヘマトキシリンエオジン」、「シヤールラッハロートエオジン」ヴァンギイソン氏染色法ヲ用ヒテ鏡檢シタ。

精密ナル觀察ノ後著者ハ次ノ如ク結論シテ居ル。即チ

一、「チモール」「オイゲノール」ハ齒根膜ニ對シテハ何等刺戟作用ハナイ。

二、兩藥劑ハ一程度マデハ齒髓ノ殘遺組織ニ作用スルモノデアル。

三、「チモール」及ビ「オイゲノール」ノ持續作用ハ總テノ部分ニ對シテ一樣デハナイ。或ハ二ヶ月或ハ六ヶ月或ハ八ヶ月ハ夫レ以上モ持續作用ガアル場合モアツテ不全デアルガ之レハ一見根管及ビ齒根膜ノ構造性質ニ關係アルガ如ク見ユル。

四、拔髓後側枝、三角分岐部又根管ノ深部ニ殘留シタル齒髓ハ腐敗スル、其ノ際腐敗產物ハ根端附近ノ組織ニ浸透シテ種々ナル程度ノ炎症ヲ惹起スル。

五、故ニ「チモール」及ビ「オイゲノール」ヲ糊劑トシテ或ハ溶解「チモール」結晶ヲ用ヒテナス根管充填ハ稍々完全ナルモノトハ見做シ難イガ然シ總テノ實驗例ニ於テ良好ナル結果ヲ見得ルガ故ニ性量的ニ齒根膜ノ炎症ノ生成ノ可能性ヲ非常ニ減退セシメ得ルモノナルコトハ確實デアル。

補 綴 科

義齒維持ニ於ケル氣壓及ビ粘著

Indruck und Adhäsion bei der Befestigung des Zahnerastzes. Von Dr. Karl Greve, in Breslau. Deutsche zahnärztliche Wochenschrift, Nr. 2, 1927.